東方執事物語

ダン・ボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方執事物語

【Ｎコード】
Ｎ１４５８Ｚ

【作者名】
ダン・ボール

【あらすじ】
この物語は古来よりスカーレット家に仕える一人の執事が主人公の物語である。警告この物語には、ハーレム、オリ主、原作無視、キャラ崩壊、オリ主マルチチート、作者、文才チリ以下、更新バッラバラ、等が含まれております。あー、俺には無理、と思った方はバックをお勧めいたします。まあ見てやる、といった心広い方は使用上の注意を読み用法を守って、気長に、正しくお読み下さい。・・・・警告は・・しました・・よ？

執事プロフィール（前書き）

とりあえずは紹介です。
駄文ながらこれからよろしくです

執事プロフィール

名前
アレス・スカーレット

性別
男女両方
ランダムで変わる。１日経つと変わることもあれば、１週間以上経っても変わらないこともある。

年齢
紫よりは間違いなく上・・・

能力
男の時
あらゆる武器を扱う事ができる程度の能力
女の時
あらゆる能力を無効にする程度の能力

外見
男は髪、目、ともに美しい青色、男の娘
セミロングで後ろで纏めている
女は髪、目、ともに美しい真紅
ポニーテール

その他説明
性格はドＳで冷静でノリが良い。
家事はなんでもござれ、知識も豊富。
一時期幻想卿から出ていた。理由はまたいつか・・・

恋愛にはそれなりに鋭いが、確信するまでが長い。
ようは気付いたのはいいが、もしかして違うかも・・・と考えたり
してかなり遠回りする。

執事プロフィール（後書き）

もう何も言うまい・・・

すいません、やっぱり一言・・・やりすぎた感が・・・

第一節　執事の一日　前編（前書き）

一日が始まるみたいです。

クリスマス・・・さびシマス

第一節　執事の一日　前編

皆様、こんにちわ。
偉大なる主、レミリア・スカーレットの執事、アレス・スカーレットでございます。
え？スカーレットって名前あるのになぜ執事なんかしているのかだって？
まあ、いずれお話しましょう、ええ、いずれ。
さて、そうこうしてる間にお嬢様が起きられたみたいです。
え、なんでわかったかって？
・・・慣れ？
まあ、なんでもいいでしょう。おや？どうやら私も御呼びのご様子。
一日の紹介も兼ねていきますか。

執事移動中・・・

「遅い！！」

いきなりですねお嬢様、慣れましたが・・・

「遅いと申されましても、私には咲夜みたいに時を止める能力はありませんし・・・」

「そんなもの関係ないわ！呼んだら1分以内に来なさい！」

「ですが、お嬢様、この館は肝心の主ですら迷うようなところ、それなのに私めが迷わずに来るのは厳しいかと・・・」

「なっ！？ま、迷ってないわ、さ、散歩しているだけよ！」

「ほう、最近の散歩は咲夜と泣き叫びながらするものなのですか、勉強になりました」

「えっ、いやっ、あれはっ、その・・・う～、咲夜～！」

相変わらず楽しいお方だ、ついでに泣き叫んでいたのは昨日のこと。そんなことを思っていると、咲夜が苦笑しながら、涙目のお嬢様を慰めている。

「相変わらずですね、アレス様」

「まあね」

楽しくてやめられません、お嬢様いじりは。

さて、今だ涙目のお嬢様は咲夜に任せて、フラン様を起こしに行きますか。

「咲夜、私はフラン様を起こしにいくから、お嬢様をよろしく」

「わかりました」

「う～・・・」

そんな目をされても怖くありませんよ？
では、移動移動・・・

執事移動中・・・

さてさて、まいりました、地下室。
そういえばまだパチュリー様にお会いしてないですね
ああ、今日は出かけると言っていましたね。喘息がひどくならなければいいのですが・・・
まあ、とりあえずは気にしないでおきましょう。
まずはドアを開け確認を・・・
一つ目、部屋の雰囲気確認・・・よし、普通。
二つ・・・ん？その確認はなにか？昔起きた事件を機に私がするようになった事です。
あれはすごかったですね、なんせ妖精の死傷者数（消滅か？）が半端ないことになりましたから。
それにお嬢様や、咲夜、美鈴、パチュリー様、私とフルで出撃しま

したし。
さらにすごいことにその全員が大なり小なりと負傷しましたし。
その中で運よく私がかすり傷で済みましたが・・・
あ、そういえば、この事件の理由、言ってませんでしたね。簡単に言いますと

お嬢様がフラン様を起こす⇒フラン様たたき起こされ超不機嫌⇒姉妹喧嘩⇒喧嘩による狂気解放⇒大乱闘

以上。

まあそんなこともあり、こういう確認するようになったのです。
・・・とはいっても2つくらいですが。
二つ目・・・これは身体にダメージがあるからとても、非常に重要である。
それは「おはよー！！！」ぬおおおおおおぉぉぉぉ！！！！

「おはよう、アレス！！」

「は・はい・・・お・おはよう・・ござい・・・ます」

これが理由である・・・ときどきフラン様はこんな風に抱きついてくるのです。
ただ、普通の人間ならそんなに痛くないし、多少よろける程度ですが、フラン様はあの吸血鬼・・・差は歴然である。
それにこの方は力加減がまだうまくできません。おかげでこのざまです。・・・私、妖怪でよかった。

それと二つ目の確認とは・・・もうわかりますよね？
周囲に隠れていないかの警戒です。
さて、確認も終り、腰の痛みも引いたし、腹の上に跨っているフラン様を降ろしますか。
・・・ああ、また美鈴に壁の修理頼まないと。
ついでにこれで５３２７回目ですね。

「フラン様、少しは加減してください、いずれこの腰が潰れてしまいます」

「ん～～～・・・がんばってみるね！」

ついでにこのやり取りは５３０１回目。

「お願いしますよ・・・それはそうと、朝食ができていますよ」

「はーーい！」

まあ、この可愛らしい顔を見れるなら安い・・・か？

第一節　執事の一日　前編（後書き）

もうちょっとマシにしたいですね・・・・
スキー行きたいなあ・・・

執事の一日　後編（前書き）

散歩行く⇒ネタ浮かぶ⇒気分最高⇒うまく書けない、表現できない⇒ｏｒｚ⇒ループ

まさに負の連鎖。しっかりしろよ、書けよ、やれよ俺・・・

執事の一日　後編

皆様こんにちわ、初めての方は初めまして。
前回腰がいろんなことに使えなくなりそうになった、アレス・スカーレットです。
では、さっそく、行ってみましょう。

執事移動中・・・

やってまいりました、紅魔館名物（だと思います）ヴワル図書館。
え？お前食事はどうするんだって？私はあまり食べません、ていうより食べなくても大丈夫なのです。
それにここは私の警備するところなので。
なぜ警備する必要があｒ「突撃ーーー！！！」・・・ほらね？さて、今日もぶっ飛ばしますか。

「今日こそはアタイが倒してやる！」

この子は散るｎ、んんんっと、チルノです・・・ん？今のはなにかって？まあ、見てればわかりますよ。

「また来たのですか、散るｎ、じゃなくてチルノ」

「ふふん、勝つまで何度でも来るわよ、だって、アタイ最強だもん！！！」

・・・そんなに薄いものを強調しなくても・・・どことは言いません、ええ。

「チ、チルノちゃん、やめようよ～」

この子は大妖精、または大ちゃん、苦労人です。

「・・・相変わらず大変そうだね」

「い、いえそんな！こちらこそいつもすいません！！！」

ああ、なんて真面目な子なのだろう、あとで、飴ちゃんをあげよう。

「さあ、羊、勝負よ！！！」

「羊ではなくて執事ですよ」

だから？と言われるんですよ。

「そ、そんなのどうでもいいのよ！！いくわよ！！」

あ、そろそろ、時間が・・・面倒ですね。ここは漫画でよく使われる伝家の宝刀、バット！！！を使いましょう。

「申し訳ありません、散るの」

「なんか名前が違う気するけど・・・何よ」

「時間が来てますのでお帰りいただきますね」

「え？」

さて、対散るｎ、じゃなくてチルノ用のスペルカード、いきますか。

「伝家・・・」

「え、ちょっ「おかえりください散るの！」名前違うううぅぅぅぅ！！！・・・（キラっ☆！）」

ふっ、今日もつまらぬ者を打ってしまった。これで打点は２４０１打点です。

「あ、チルノちゃーーーん、待ってーーーー！！！」

あ、飴ちゃん・・・まあいいでしょう、また来た時に渡せばいいでしょう。

「・・・次、いきますか」

本日の警備は今ので終了ですし。あっ、あとさっきのスペルにはもう一つ別のがあるのですよ。
まあ、あまり名前は変わりませんがね・・・その名も伝家「お帰りくださいお客様！」です。
あ、どうでもいいですね、そうですよね、じゃあ行きましょうか。

執事移動中

次の場所は・・・自室です。
なぜ自室か？・・・それは、待機のためです。
まあ、要はしばらくやることはないのですよ。
本来ならさらにすべきこともあるのですが、お嬢様が
「あなたは本来執事ではなく当主なのだからそんなものしなくていいのよ！！」
だそうです・・・。

まあ、確かに本来血が繋がっていたら、ですけど。
そのことを申しますと

「そんなことは関係ないのよ！」

だそうです。それでも私が渋るとお嬢様が折れて

「わかったわ、やらしてあげる。でも！！あなたは本来私たちの兄であり、スカーレット家の当主、そのことは忘れないで！」

とのこと。
それから執事をやらせていただきました。が、咲夜が来てからは私のやることはかなり減りました。
まあ、それでも色々忙しかったですがね、咲夜のメイド修行で。初めのころはそれはもう、目も当てられないほどで・・・。
まあ、この話はまたいずれしましょう。
さて、やることも無いですし、少し眠りましょう、どこぞの門番みたいに。
あ、最後に一つ、私、今日は男ですよ。
え、今さら？・・・ですね。
では、おやすみなさい・・・・。

執事の一日　後編（後書き）

だ・ぶ・ん、来ちまったよ、ちきしょうめ！
あ～、もう今年も終わりが近づいてきたなあ、はやいなあ。
そしてやることが少ない執事・・・執事なの？

第二節　執事、宴会に行く　前編（前書き）

なんでだろう、最近俺の自重神が叫んでいる気が・・・・・

第二節　執事、宴会に行く　前編

皆様、こんにちは。
仕事という仕事がないのになぜか執事をしている、アレス・スカーレットです。
・・・はっ！すいません、先程まで寝ていたものでしてちょっとぼーっとしてしまいました・・・。
さてさて、とりあえずどのくらい寝ていたのでしょうか、時計を見てみましょう・・・2時間ですか。
結構寝てましたね。
とりあえずやることも無いですしどうしましょうか、二度寝しましょうか？
・
・・・
・・・
5分経過
・・・
・・・
10分経過
・・・
・・・
20分経過

・
・・・
30分後・・・
何も思い浮かばないですね、ええ、全く。
二度寝したくても目が覚めていますし、さてどうしm「お兄様ーーーー！！！」・・・これで暇では無くなりましたね。あと、扉壊してくれてありがとう。そしてごめん、美鈴。
とりあえず、フランさm、じゃなくてフランが私に用があるみたいですね。
え、なんで様呼ばわりじゃないかって？日付変わりましたし。
それにプライベートと仕事は別にしてあるからですよ。
というのも、実はレミリアが

「あと、やるからにはプライベートと仕事は分けなさい」

とのおっしゃったんですよ。それで分けました。まあ、普通ですよね。
ついでに私は咲夜と違い仕事は毎日ではないんですよ。
今のところは、月、水、木が私の仕事の日です。勤務時間は日付が変わるまで。
え、なぜ毎日じゃないのか？レミリアに聞いて下さい。あの子の我儘でこうなったんですから。
それはそうと、フランは私に何の用なのでしょうか。

「どうしました？」

「お姉様がね、今日あの色々と貧相な巫女の所で宴会があるから来なさいって」

「そうなのですか」

宴会、ですか・・・

「あの、フラン？」

「なあに」

「その宴会、誰が来るんですか？」

「ええっと、魔理沙、貧乏巫女、隙間ばb、妖怪とあと・・・」

ああ、あの隙間が来るんですか・・・できればもう二度と会いたくないのですがねえ。

「・・・くらいだよ？」

「そうですか」

残念ですが辞退しますか。

「申し訳ないですが、じたいｓ「駄目よ、お兄様」・・・なぜです？レミリア」

いつの間にかレミリアが部屋にいた。

「連れてくるように隙間とその式、あと亡霊、挙句には花妖怪からもお願いされているから」

「・・・行かないとどうなります？」

「そうね、たぶん紅魔館が消えるんじゃない？あの物言いだと」

なんという脅しだ。せっかく今まであの隙間と式、亡霊姫に花妖怪にも会わずにいれたのに。

「・・・・・」

「ねえ、お兄様」

「ん、何ですか？」

「そろそろ話してよ」

「・・・・・・またですか」

「ええ、またよ。昔、何があったの？あの隙間達と・・・」

「・・・・・まだ、話せません」

「・・・そう」

そういうととても悲しそうな眼をするレミリアとフラン。
でも・・・そんな眼をされても・・・まだ、話したくありません。
申し訳ありません・・・。
私は心でそう謝罪をする。

「とりあえず、ここを守るために今回は参加しましょう」

「ええそうね・・・」

さて、宴会か・・・血を見ることにならなければいいですが・・・

第二節　執事、宴会に行く　前編（後書き）

んん～、ちょいシリアス？かな
さあて、どうなるのやら・・・
ついでに紅霧異変は起きてない。
なのに魔理沙と霊夢と知り合い・・・謎だぜ、俺

執事、宴会に行く　中編（前書き）

2連発・・・しっかりしようか、俺。そのうち俺の自重神に怒られるぞ

執事、宴会に行く　中編

皆様、こんにちわ。
宴会のせいで気分最低なアレス・スカーレットです。
今私は地下倉庫でどのワインを持っていくか悩んでいます。
一応候補は挙がっているんですよ？
その候補とはこの４つです。

スカーレットワイン

デビルブラッド

ブラッディマン〇ィ

ワイン

・・・ええ、私も色々言いたいですよ、本当。まともな物は無いのかとか、普通は？とか。
でも無いんですよ。まともが。
だってほかのが

バーニング

とか

Ｉｃａｎ　ｆｌｙ

とか・・・・
なんです、バーニングって！？
あれですか、叫びながら飲むんですか！？
最後のなんて飛ぶんですか！？ええ！？
みたいにまともなのがありません。
とりあえず仕方ありませんから、この『ワイン』にしましょう。
１番まともですし。まあ名前が普通過ぎますが。

「決まりましたか？」

咲夜か。

「まあ。大体は」

「そうですか」

と微笑む咲夜。相変わらず綺麗な笑みですね。昔はあんなに殺気をまとった笑みだったのに。

「ふふ」

「どうかしましたか？」

「いえいえ、ただあれほど笑うのが苦手だった咲夜がこんなに綺麗に笑うようになったものだからから、つい」

「き、綺麗だなんて、そんな・・・」

照れてる咲夜もかわいいなですね。さぞモテるでしょうね。

「そういえば、君に好きな人はいるのですか？」

「ふぇ？・・・す、好きな人ですか！？」

何を慌てていうのでしょう？はは～ん、さてはいるんですね。

「いるんですね？」

「え、あ、えっと・・・はぃ・・・」

おやおや、顔が真っ赤ですね。

「どうなんです？その人とは」

「・・・・・」

さっきの慌てぶりから一転、しょんぼりしている咲夜。・・・まあ、なんです、チャンスはまだありますよ。

「チャンスはまだありますからがんばってください」

「・・・ええ、がんばります」

そう言いながら、腕に抱きつく咲夜。・・・まさかな。あと、胸、当たってるよ。ついでにＰＡＤじゃなかったんだな・・・

ま、まあとりあえずがんばれ咲夜！

その後、適当に選んだワインを持って咲夜と一緒にレミリアのもとに行く事にした。

なぜか、レミリアに睨まれたが・・・なぜだろう？

執事、宴会に行く　中編（後書き）

まあ、宴会に行くまでのちょっとした話ですね。
あと地味に咲夜フラグ立っている執事。気づいてやれ。

執事、宴会に行く　後編（前書き）

クリスマス・・・さびシマス
カップル・・・殺しマス
というか、1年過ぎるのが早いなオイ

執事、宴会に行く　後編

皆様こんにちは。
今絶賛歩きながら八つ当たりを受けている、アレス・スカーレットです。
なぜなのでしょう、咲夜と一緒に居ただけなのにレミリアにものすごく怒られています、ええ、ほんとに。ついでにフランにも。
理不尽です、意味不です、無茶苦茶です。
今も横から「なんで咲夜と・・・」とか「そもそも私が・・・」とか思いっきり言われているのですよ。
咲夜は咲夜で「リードですね」とか「これに関しては主従関係なんて・・・」とか所々レミリアやフランに茶々を入れるものだから、さらに大変なんですよ。
はあ・・・それでなくてもあのクソ隙間のみならず、あの亡霊、挙げ句には狐に花妖怪まで・・・。

「・・・はあ」

鬱ですね。
え？なんでそんなに奴らが苦手なのかって？
・・・その質問は間違ってますよ。正確には『苦手』ではなく『大嫌い』ですよ。さらに正確にいうと『憎い』です。
で、その理由は・・・私の大切な家族を奪ったからですよ。ええ、物理的に、命を。しかもご丁寧に私の目の前で、楽しそうに笑いながら。

それ以来私はあいつらを避けていました。二度と見たくないから。
今回行く気になったのは、久々にどのような顔をするか拝見するためですよ。
あとは・・・レミリアに説明無しで簡単に教えるためですかね。なぜあいつらを嫌っていたかを。
正直言って今回宴会に参加する人には申し訳ないと思っているのですよ。空気を重くしてしまうんですから。
とりあえず・・・この話は終わりにして、さっさと行きましょうか。
それと、レミリア、咲夜、うるさい。
・
・・・・
・
執事達、進行中・・・
・
・・・・・
・
さあ着きましたよ博麗神社。けっこうにぎやかですね、１０人くらいでしょうかね。メンバーは・・・
霊夢
魔理沙
アリス
パチュリー
小悪魔
八雲紫と藍
幽々子と庭師

幽香
そして我らがレミリアと咲夜、そして私。
まあ、小規模なのですかね、この幻想卿では。
ていうかパチュリー、ここに来ていたのですか。こあも。
あ、今さらながらどういう経緯で知り合ったお教えしておきましょう。
霊夢はたまたま買い出しに行っている時に出会いました。
魔理沙は魔法の森で珍しい物を探している時に。
アリスも同じ。
後は必要ないですね。
・・・まあ、八雲や亡霊などの出会いはいずれ話しましょう。

「あら、来たの？」

「来ましたよ」

「遅いぜ」

「まあ、色々とね・・・」

「こんにちは、アレス」

「こんにちは、アリス」

「案外遅かったのね」

「まあ、レミリアがちょっとね・・・」

「大変ですね・・・」

「慣れましたよ」

次々と挨拶を済ませていると視線を感じました。
八雲たちです。
・・・仕方ない、挨拶しますか。あまり空気を重くはしたく無いですし。

「これはこれは、賢者様、ご機嫌いかがですかな？」

「・・・まあまあね」

「そうですか、他は？」

「紫様と同じだ」

どうやら他の3人もそうらしい。
そうですか。まあどうでもいいですが。

「そうですか、では私はこれで」

「あ・・・」

と伸ばそうとして引っ込める八雲紫。
まあ、奴らに私を止めることなのできないでしょうがね。
私はそれを無視することにしました。

「ああ、それと一つ」

「・・・何？」

「貴様らを許す気などないからな。これは一応礼儀で挨拶しただけだ。昔のように楽しく喋りあえると思うなよ？」

「っ！・・・」

「じゃあな」

紫だけではなく他の3人の顔も悲しみに染まっているようです。
私はそれを無視して、こちらを見ていたレミリアのもとに向かいました。

「おわかりいただけました？」

「・・・ええ」

「そうですか」

レミリアも今のを見て理由は分からなくても、どういう関係かは分かったみたいです。

「でもなんで？あのあなたが敬語以外で喋るなんて・・・」

「別に元から敬語ではなかったですし、あいつらには、その必要もないですから」

「・・・」

「ではレミリア、私は手伝いなので」

私はレミリア達を置いて、手伝いに行くことにしました。
ついでにあのあとからはレミリアも私、八雲達も気分は上がらず、宴会を終えました。
霊夢や魔理沙達はクソ程テンションが高かったにも関わらずに・・・

執事、宴会に行く　後編（後書き）

ついでに作者は八雲家も好きですよ、亡霊も花妖怪も。
さてさて・・・もうちっと文の書き方を変えてみようかな・・・
まだまだ改善せねば

第三節　執事、女体化する（前書き）

さて、今年もあと数時間。
早いもんですねえ・・・

第三節　執事、女体化する

午前８：３０

・・・・・・・はっ！、あ～皆様おはようございます。
今目が覚めたばかりのアレス・スカーレットです・・・ふあ～～～・・・眠い。
なぜだかすごく眠いです。今も現在進行形で睡魔と闘っております。
とりあえず、ボケっと・・・ん、今日は女の姿ですか。
なるほど、道理で眠いわけですよ。
姿が変わると体力の消耗が激しいのかものすごく疲れるみたいなんですよね。おかげでこの通り
無茶苦茶眠いです。
ふと思ったんですよ。私、今まで自分の姿が変わるところ、見たことないんですよね、とても不思議です。
まあどうでもいいですね。ああ、それとなぜ女になったことに気付いたかと言いますと・・・胸が重かったからです。あ、今の言葉、お嬢様には内緒でお願いしますね。ずっと前にお嬢様がこの胸を見て
「私だって・・・私だって・・・」
と１日中落ち込まれた時がありまして大変だったんですよ。
いきなり泣きついて来られたり、グングニルが飛んできたり、噛みつかれたり・・・。
逆にフラン様は
「すご～い、バインバインだ～！」
とか
「やわらか～い」
とか
「私も将来ボン、キュ、ドカーンなナイスバディになるかなあ？」

とか。ついでにその時のドカーンでお嬢様がピチュッたのは今でも覚えています。
そして
「フラン様、あなたの母上様はナイスバディでしたから大丈夫ですよ」
と私が言い、フラン様がお喜びになったのも今でも覚えております。
そういえば、母上様は今どこにいるのでしょうか・・・父上が病気でお亡くなりになってこの館を出てから早４００年、今だ連絡もありませんし、無事だと良いのですが。
まあ、そのことは今は置いておいて、目もいつの間にか覚めましたしさっさと着替えましょう。
服装は咲夜のメイド服の白黒バージョンと言っておきましょう。

少女着替え中、覗くな危険（生命的な意味で）

第一感想
「相変わらず慣れないですね・・・」
スカートとかはいつ履いても慣れません、ていうか短いですね、下着とか見えますよ、これ。
よく咲夜はこんなものを毎日履いてますね・・・。
愚痴っても仕方ないですし、さっさと行きましょう。

少女移動・・・

「おはようございます、アレス様」

「おはようございます、咲夜」

大広間に着くと咲夜がすでに掃除を始めていました。相変わらずの速さです。

「なにかすることは？」

「そうですね・・・あ、北館のお掃除をお願いします」

「わかりました」

またも移動中・・・

「まったく、相も変わらず迷惑なほど複雑ですね」

どうしてこんなにも複雑なのでしょうか。
もう少しシンプルでも何ら問題は無いでしょうに。
まあ、今さらですし、掃除をしましょう。

掃除中・・・

ふう、とりあえずは終わりましたね。あとはゆっくr「パリーーン！！！」・・・予定変更ですね。
とりあえず、私は『新聞』を不法投棄した『レズ』天狗を睨みます。

「文、何度も言ってるでしょう、不法投棄は止めなさいと」

「あやや、不法投棄ではありませんよ、立派な新聞配達ですよ！それと、私はレズではありません、両方いけるだけです」

「配達の仕方を変えなさい。そして私のナレーションに突っ込まないでください。ついでに、現在進行形で胸揉まないでください、くすぐったです」

やはりレズか、そして変態ですか。というか毎度毎度胸揉まないでください。
とりあえず、いつの間にか後ろにいた変態レズ天狗に向かって肘鉄を食らわす。

「いだっ！！あいたたたた、相変わらず素直じゃないですねえ、隙間が言っていたツンデレってやつですか？」

・・・もはや手遅れなのでしょうか。昔はあんなにも真面目で恥ず

かしがり屋だったのに・・・。

「・・・手遅れなんでしょうね」

「何を言いますか、今でも私は清く、正しい、射命丸文、ですよ」

「駄目で、ゴシップ、射命丸文の間違いでしょう」

「いやいや、私は事実を書いているだけですよ?」

あれで、ですか・・・

「それよりも、配達は?」

「ここで最後ですよ?」

「なら帰りなさいな」

「嫌ですよ、私の可愛い可愛い将来の恋人、アレスを置いて帰るわけないでしょう」

「置いても何も、私はここの者なので」

「嫁入りしたら妖怪の山の者ですよ?」

「残念なことに今のところ妖怪の山の方で愛している方はいないので」

「またまた、照れちゃって～」

・・・ダメです、救いようが無いです。

「・・・」

「・・・（にっこり）」

「・・・はあ、わかりましたわかりました。少し私の部屋でお待ちください、掃除が終わったら紅茶を持っていきますから」

「さすが私の将来の嫁、わかっていますねえ。では、お言葉に甘えて」

そういうと文は私の部屋に猛スピードで向かっていった。

「・・・掃除しよ」

掃除中・・・・

少女移動中・・・

「終わりましたよ」

「おつかれｓ、って、どうしたんですか、ものすごくお疲れの顔ですけど・・・」

咲夜がとても心配そうに顔を見てきます。
まあ、あんなことがあったのです、疲れても何らおかしくないでしょう。

少女説明中・・・

「なるほど・・・」

「わかりましたか」

「ええ、あの天狗を殺れば良いんですよね」

あれ？一文字おかしいような・・・

「ん？咲夜、顔が怖いですよ？」

もうそれは鬼すら逃げてしまいそうなほどに。

「ではまいりましょう、アレス様、うらやｍ、んん、不埒な輩を潰しに」

あれ、ちょっと聞き間違えた？

「ま、まあまあ、落ち着きましょう咲夜」

「何をおっしゃいますやら、私はいたって冷静ですよ、ｃｏｏｌですよ、冷静沈着ですよ、昔からよく物静かで冷静な子ね、とよく言われていましたし」

咲夜、あなたが壊れてきています。

「さあさあ、行きましょう、いざ、まいりましょう」

「咲夜、落ち着きましょう、って、何この馬鹿力は！？」

少女、引きずられ中・・・哀れ

「天狗！！念仏を唱える準備は良くて！？」

ああ、咲夜が扉を蹴り壊したせいでまた修理が必要に・・・

「あややや！？いきなりなんですか！？」

「うるさい！？貴様のようなうらやm、っと、不埒な者は今すぐ葬らなければ！」

・・・おかしい、咲夜はもっと静かで真面目なはず。

「不埒とは失礼な！将来夫婦になるのですからこれくらいのスキンシップは普通です」

あれ、女同士で結婚できましたっけ？それより私の意志は？

「寝言は寝てから言いなさい！女同士の結婚なんて頭大丈夫？」

「あやや、この幻想郷に常識なんてありませんよ？」

おい、それはそれでどうなんですか？

「と、ともかく！アレス様はこの館に必要なとても大切なお方！あなたのような者にやるわけにはいかないわ！！」

・・・もう、何も言いません。

「ならば、力ずくでも貰って行きますよ？」

「・・・やれるものならやってみなさい」

わーお、部屋の温度が低下してますよ。
それより、暴れるなら外でしてもらいましょう。

「二人とも暴れるなら外にしてください」

「わかりました。任せてください、私がこの天狗を駆除してみせます！」

「ほう、それは楽しみですねえ、ではアレスさん、愛のひと時はまた今度で。では！」

そういうと二人は外に出た。
・・・平和の良さを改めてわかった、今日、このごろなのでした。
ついでに3時間後、私がお昼のおやつを食べていると咲夜がボロボロになりながらもすっきりした顔で戻ってきました。

第三節　執事、女体化する（後書き）

来年は良い年になりますように・・・
感想などお待ちしております

では皆さん、良い年を！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1458z/

東方執事物語

2011年12月31日19時50分発行